

海上自衛隊掃海艇部隊による湾岸戦争後の機雷爆破処理（「アラビア石油 35 年史」より）

短期集中連載

過度の平和主義、国際貢献への制約… 日本は邦人保護策の再検証を

岡本 文夫

元衆院議員秘書

1990 年 8 月、イラクのクウェート侵攻（湾岸危機）後、我々アラビア石油の従業員はクウェート国境地帯のカフジで操業を続けた。翌 1 月 17 日の開戦によりカフジからサウジアラビア東部のダンマンに逃れたが、そこではイラクによる連夜のスカッドミサイル攻撃に見舞われた。東部より安全な西部ジェッダへの避難や王族用チャーター機による国外脱出も検討されたが、一連の危機対応に関して残念ながら我々には日本政府に助けてもらった実感は全くない。退避したくても果たせない邦人たちは、サウジ政府に掛けあってでも保護すると考える外務官僚は皆無。小長啓一副社長（当時）による捨て身のナーゼル石油大臣折衝が、カフジに残った日本人従業員の脱出について最低限の配慮を引き出し、あとは我々自身の命懸けの自助努力で切り抜けてきたただけだ。湾岸戦争突入の日、不幸にして日本人従業員が大量に殺戮されていたなら、日本政府はどう考えたであろうか。

避難が遅れれば大惨事に

42 日間の激闘の末湾岸戦争が終結し、我々は直ちにカフジへ。被弾破壊された基地に日本人従業員 130 人が一挙に戻るのとは不可能なので、施設担当者を第一陣に送り込み、収容態勢を整えつつ 1 カ月かけて 4 陣を順次帰任させた。イラク軍が撤退時にクウェート全土の油井約 700 本を爆破したため、轟然たる劫火は膨大な黒煙と未燃原油を吹き上げており、黒煙の総和は空全体を覆っていた。消火完了までの 4 カ月間に、丸一日漆黒の暗夜が続いた日が 3 回あったし、そこまででなくとも水平線あたりだけが僅かに明るいだけの日々が続いた。

我々の脱出後も砲撃が続行された跡は歴然。避難時よりもはるかに被災が広がっていた。脱出タイミングが一步遅ければ、果たして死者を出さずに済んだかと思うと、慄然たる思いがした。

施設の残骸や砲弾の破片が散乱する中、我々は状況把握と対策に追われた。筆者が統括する SHIPPING 事務所からの指令によって、沖合 16 マイルにある船積み施設と事務所南 2 キロにあるタンク群を連動させるには通信機能が必須だ。しかし、通信制御室は直撃全壊しており、技術者と共に装置一式を空輸しなければならなかった。

遅れて帰任した現地従業員と必死に原状回復に努め、やっと 2 ヶ月後に原油生産は再開。空を覆う濃いスモッグ越しに仰ぐフレアスタックの炎は、男達を励ました。

困難を極めた航路復活

最も困難を極めたのは、カフジ航路の復活だった。イラク軍は戦争中に 1200 個の機雷を敷設したと伝えられており、アラビア湾北部に乗り入れるタンカーなど 1 隻もない。小長啓一社長（91 年 3 月に昇格）が、運輸省（現国土交通省）に航路復活を要請しても、船主協会と海員組合は配船峻拒。カフジの海務スタッフ全員が海上就労を拒否していたくらいだから無理からぬ話ではあった。

筆者は説得材料として 1 隻でも来航実績を作ろうと、湾岸全域で安い重油を買い漁るバンカー（タンカーの燃料油）業者に目をつけ、被災を免れた重油タンクの残油を半値にダンピングする案を考えたが、営業部はこれを拒否。しかし、原油出荷・海務統括部長の池野侃は、正攻法で問題解決に挑戦した。南 250 キロのジュベイルにあるサウジ海軍司令部に、掃海艇の出動を要請したのだ。海軍は、一民間企業への便宜供与は任務の対象外として拒否したが、池野は幸運だった。顧問として派遣されていた多国籍軍掃海隊のシュワート米海軍大尉が、会議の横を通りかかった。必死で陳情する、初めて見た日本人から話を聴いた大尉は快諾してくれたのだ。イラク軍が多国籍軍に提出した機雷敷設図によれば、5 海域中のひとつが全長 60 マイルのカフジ航路の中央部に被さっていた。

一方、小長社長の懸命の調整により、2 隻のタンカーの配船が決まった。しかし、絶対条件として、航路の進入点に当たる 60 マイルの地点まで会社の船が出迎えて、タンカーを前衛して安全保証せよという。2 隻の実績をもって、航路安全を

認定するとのことだ。

出荷再開第 1 船『高千穂』（日本郵船）は、急遽日程を追加して、ドバイからカフジに向かった。幸い、シュワート大尉が指揮する掃海艇は、高千穂来航の前日にカフジ港に到着。池野と筆者は喜んで港に駆け付けた。そこで、池野は無理を承知で大尉に更なる協力を依頼した。「丁度、明日正午に第 1 船がカフジ航路進入点に到着します。我々は、安全証明のためにこれを先導しなければならない。掃海艇も加わって頂ければ、どれほどタンカーが励まされるか解りません」。池野の真剣さに一目置いていた大尉は、海の男の以心伝心でこれを了承。「敷設海域は、40 マイルポイント周辺が一番危ない。明朝はその辺りを重点的に掃海して、そこで待機しましょう」

我々は、触雷しても沈没までに少しでも時間を稼げるよう、保有船中最大のタグボート（300 トン）に司令官として乗り込んだ。濃密なスモッグが垂れこめる中を、タグボートは超微速で会合点を目指した。操舵室では、固唾を飲んで前方海面を凝視し続けた。先発した掃海艇に追いついた時、我々は初めて視線を横に向けヘルメットを振り回し、大尉は敬礼を返した。

高千穂との交信は既に始まっていたが、濃く垂れこめるスモッグのせいで、船体は至近に迫るまで視認できなかった。スモッグのカーテンを破って、突然その巨体がヌッと現れた。我々は歓声を上げ、前甲板へ出てヘルメットを振り回した。高千穂船上では艦橋に繋がるサイドブリッジにクルー全員が飛び出して、両手を振って歓迎してくれた。

航路右前方を先導する我々に、40 マイルポイントで待機していた掃海艇が合流して左前方を前衛した。カフジ沖 16 マイルの係留施設が近づくと、掃海艇は汽笛を鳴らしジュベイル目指して去っていった。手を振って見送る我々に、大尉は遠ざかりながら敬礼を返した。米国軍人が見せた一期一会の清々しさに感動を覚えた。触雷の恐怖に耐えての航路再開完遂は誇らしかった。

日本の掃海艇に感激の涙

やっと国会では自衛隊法に定める人道目的出動が認められ、落合峻司令官率いる海上自衛隊の掃海艇がアラビア湾に向かった。我々は海上油井群

パトロール用のヘリコプターで上空から艦隊を激励した。「よくぞ、こんな危険な海まで来てくれた」と、日の丸を掲げて果敢に掃海する姿に感激の涙を禁じえなかった。旗艦早瀬率いる3隻の掃海艇は、7カ月間に34発の機雷を処理して、アラビア湾最奥部の安全を取り戻してくれたのだ。アラビア湾からはホルムズ海峡を経て、日量1800万バレルの原油と年間8000万トン以上の液化天然ガス（LNG）が世界に搬出される。この重要航路の安全回復への国際貢献は、カフジの我々を激励した以上に大きな意義がある。しかし、戦後、クウェート政府が米紙ワシントン・ポストに掲載した各国への感謝広告には日本の国名と国旗の掲載はなされなかった。

過度な平和主義から自国民保護のための方策も持たず、国際社会が協調して危機対応しなければならない状況においても貢献手段が制約される時代が続いた。これに風穴を開けたのは、前述の掃海隊派遣と宮沢内閣時代のPKO協力法の成立による国連平和維持活動への参加だった。PKO施設部隊600名がカンボジアに向かい、インフラ復旧、給水や医療で貢献した。また、小泉内閣時代には、9.11テロの大惨事が発生し、国際的にテロ対策と安全保障の協同意識が高まり、国際平和協力法、改正自衛隊法、周辺事態安全確保法等の法整備が進んだ。アフガン戦争の際は、3隻の護衛艦と2隻の補給艦をインド洋に派遣し、米英仏の空母群を始めとする7カ国で構成された70隻の艦艇に給油して後方支援を担った。また、イラク戦争終結後は、イラク特措法の成立により人道復興支援活動のために、番匠幸一郎司令官率いる陸上自衛隊560名が、イラク南部のサマーワに派遣された。地域社会への給水、破壊された病院への医療器材や薬品供与、小中学校の修理、道路の復旧等を通じて現地住民に感謝された。イラク復興プロジェクトには自衛隊輸送機や輸送艦も動員されている。

外務省や経済産業省の姿勢にも、湾岸戦争頃の事なかれ主義から積極的な活動への変化が見られるのは喜ばしい。イラク特措法の精神の下に、両省職員は医療現場や産業復興支援のための尖兵として、国連の下部機構・イラク復興人道支援局（CPA）と連携しながら、日本に何が出来ると

イラク各地を調査して回り、ひとつひとつ復興を実現していった。

今般、中東のタンカー航行の安全確保のために、米国始め7カ国と協調して、防衛省設置法に基づく海上自衛隊派遣が閣議決定された。2月から、護衛艦1隻と哨戒機2機が、その任に当たる。

ただ、治安悪化してしまった現地での支援活動には危険が伴う。カンボジアへのPKO協力では、岡山県警の高田晴行警視が犠牲になり、イラク復興支援では奥克彦大使と井ノ上正盛書記官がテロにより殉職されたのは国家的痛恨事だった。また、湾岸戦争で被弾死したカフジの日本人従業員はいなかったが、精神的拘束による過酷なストレスが、6名に癌を誘発し、帰国後3名が逝去したのも悲しい事実である。

読者は、何故28年も前の湾岸戦争を語るのかと思われるかも知れない。しかし、経済・技術先進国である日本と石油資源が豊かな半面、リスクが内在する中東圏との関係は今後も変わらない。ビジネスマンは現地に赴き続ける。アラビア石油が湾岸危機・戦争に如何に対処したかが、危機管理の一事例として参考になれば幸いである。

また、そうした任務遂行を支援するために、日本政府は邦人保護の方策を再検証する必要があるし、国連ベースの平和活動にプレゼンスを示すための法整備も怠りなきよう願いたいものだ。



「高千穂」（日本郵船）をカフジ沖まで先導した池野侃部長と筆者（右）



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。